

金城一紀『GO』論

—— 在日文学から見るアイデンティティ ——

安 東 悠 奈

第一章 在日

第一節 「在日」とは―歴史、表現、帰化―

「在日」とは、言葉どおりの意味では「外国から来て日本に在住していること」⁽¹⁾である。しかし、ほとんどの人々は「在日」とは「在日韓国人・朝鮮人」を指す総称（略称）であると認識している。現に大手検索エンジンでは「在日」とは「在日」と「在日」の言葉の意味の次に「在日韓国人・朝鮮人」という項目が表示されるのである。本論では、福岡安則氏の『在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ』⁽²⁾に則って、在日の歴史を辿ることとする。

在日と呼ばれる人々が誕生するきっかけは、一八七五年

におこった江華島事件である。翌年に日朝修好条規が締結されるきっかけでもあるこの事件を機に、朝鮮半島から日本へ、日本から朝鮮半島へと人々の往来がはじまったとされている。一八九〇年代には朝鮮半島から日本へ渡航し、厳しい労働環境の中で働く人々が増加した。一九一〇年に韓国併合条約が締結され、日本は朝鮮半島を植民地として支配し、日本国籍を与えられた朝鮮人たちには日本語教育が施されるほどであった。もともと朝鮮半島から日本への移住者が増加したが、一九一四年の第一次世界大戦時である。軍需産業が盛んになり人手不足だった日本に多くの人々が移住した。その後も朝鮮半島から日本への移住者は増え続けるのである。一九四五年、第二次世界大戦における日本の敗戦から同年のポツダム宣言の受諾によって、日

本による朝鮮半島の領有が終了した。それとともに、日本へ移住した人々を対象とした祖国帰還事業がおこなわれ、朝鮮人たちは植民地からの解放を経験する。しかし、祖国帰還事業のただなかに朝鮮半島が分断された。大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の成立を含むさまざまな問題から帰還者が減少し、日本に留まる人々が増えたことから「在日」と呼ばれる人々が誕生したのである。日本に残留した人々は、植民地からの解放とともに、与えられた日本国籍を失ったのち、韓国籍または朝鮮籍という国籍の選択を余儀なくされる。その結果、在日には「韓国籍を持つ在日」と「朝鮮籍を持つ在日」が存在するのである。また、「在日」という表現のはじまりについて、「《在日》という表現は《在日本》のつづまった言い回しであり、もともとは在日韓国・朝鮮人の当事者自身が使いはじめた言葉（福岡一九九三・一八）」であり、「当事者自身が、日本は仮住まい」という意識を強くもつていたことの表れ（福岡一九九三・一八）」であるという。

近年では韓国・朝鮮籍から日本国籍に変更（帰化）する者が増えており、帰化申請者数のピークであった平成一五年には一万一七七八人が国籍の変更をおこなった。⁽³⁾ 帰化の理由について、仲尾宏氏は「九〇年代に入ると日本人との国際結婚が増加したこと、三世が成年に達し、結婚・就職

という人生の転機にさしかかったことが、日本での永住がほぼ前提とされるなどの状況変化があり、《帰化》希望者そのものが増えてきたものと思われ（仲尾一九九七・二五）」と分析する一方で、次のように述べている。

ところで多くの在日韓国・朝鮮人が「帰化」を申請する理由は「どうせ日本に永住するのだから」というケースが大多数でしょう。しかし一皮めくれば日本国籍がないためにさまざまな日常生活での不利益——公務員採用、地方参政権、年金、などの行政的差別があり、また結婚、就職、住居、職場や地域でのつきあひ上、常に偏見や差別意識にさらされていることから抜け出したい、という願望があります。（仲尾一九九七・二八）

行政的差別をはじめ、ライフイベントや日常生活においても国籍による問題が多々存在するのである。これらの理由から在日の人々は帰化をおこなうのである。

第二節 在日文学―世代区分と作品傾向―

磯貝治良氏は『在日』文学論』の中で「在日朝鮮人文学」という呼称が一般的に使われるようになったのは、厳密に調べたわけではないが、一九六〇年代はじめあたりからではないかと思う（磯貝 二〇〇四・九九）」と述べている。その理由は、「在日文学」という呼称が使われるようになるまでの間、「日本語で書かれた朝鮮人の文学」として捉えられていたからである。「在日文学」という呼称が普及して以降「在日朝鮮人文学」や「在日朝鮮人日本語文学」、「韓国」と「朝鮮」のどちらを先に置くべきか議論されている。「在日韓国・朝鮮文学」といったような呼称も登場する。

在日文学は、一般的に三つの世代に区分される。しかし、明確な世代区分が存在していないため、在日文学のはじめりにあたる第一世代の作家には異なりが生じる。本論では、磯貝氏による『在日』文学論』に則って、世代区分をおこなうこととする。

第一世代は、一九六〇年代はじめに登場した作家たちである。金達寿キムダルスによる『後裔の街』を皮切りに、許南麒ホナムギや金時鐘キムシジョンは詩の創作で話題を集めたという。金達寿の『玄海難』、『朴達の裁判』はそれぞれ芥川賞候補に挙げられた。

日本による植民地支配下での生活、解放を経験している第一世代の作家たちには祖国への「希求心」が共通していると述べている。日本での生活はあくまでも仮暮らしであり、祖国に帰るといふ帰属意識が強く描かれていることから、在日による文学活動も主には母国語で成されていたという。しかし、日本文学界と読者が文学的評価を与えなかったこと、「希求心」を強く持つ第一世代の在日作家たちが「仮の文学」として位置づけを望んだことから、「在日文学」というジャンルの確立には至らなかったとされる。

第二世代は、一九七〇年代に登場した作家たちである。金鶴泳キムハクヨンや李恢成イフエソンなどが活躍し、李恢成は在日文学で初めて芥川賞の受賞を果たした。在日文学の最盛期と言われた第二世代は、日本での暮らしが定住化へ変化しつつあったことから、母語である韓国・朝鮮語での作品の執筆が不可能な世代であるという。また、第一世代の作品よりも祖国との関係性が薄れ、韓国・朝鮮人でありながら日本で生まれた育った「マイノリティ」としての意識が強く、日本で生きる中の葛藤が作品に多く描かれているという。

第三世代は、一九八〇年代に登場した作家である。代表的な作家には李良枝イヤンジや柳美里ユウミリ、玄月などがおり、本論で取り上げる金城一紀も第三世代にあたる。もつとも新しい第三世代の作家には、崔実チュエシルが挙げられる。「超新人の出現！」

という選評とともに第五九回群像新人文学賞を受賞し、出版された『ジニのパズル』は第一五五回芥川賞候補作品としても注目を集めた。第三世代は第二世代と同じく、韓国・朝鮮語での作品の執筆が不可能な世代であるという。そして、時代状況の変化から日本への同化傾向が見られ、第一世代のような「祖国と自分」といった関係性から生まれる思いではなく、「日本社会と自分」といった「日本社会への同化」とその葛藤やアイデンティティの追求が、作品に多く表れているという。祖国との物理的距離だけでなく、精神的距離も第一世代や第二世代よりも遠く、日本での定住によりマイノリティとして生きる個人の葛藤やアイデンティティの探求が強く描かれている。また、在日でありながら日本名で執筆活動をおこなう日本名作家が多く登場したという。

(4) 磯貝治良『在日文学論』、新幹社、二〇〇四年、一〇
—一九頁

- (1) 新村出(編)『広辞苑 第五版』、岩波書店、一九九八年
- (2) 福岡安則『在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ』、中央公論社、一九九三年、二二—二六・三一—五〇頁

- (3) 「帰化許可申請者数、帰化許可者数及び帰化不許可者数の推移」<http://www.moj.go.jp/content/001180510.pdf>
(二〇一六年一〇月二七日)

第二章 作家・金城一紀

第一節 金城一紀と『GO』

金城一紀氏は、一九六八年一〇月二九日に埼玉県川口市で誕生した。小学校一年生から中学校三年生までの九年間を民族学校で過ごし、朝鮮籍から韓国籍への国籍の変更を機に日本の高校へ進学した。

高校卒業後、二年間の浪人生活を経て、慶應義塾大学法学部へ進学。大学一年次に作家になることを決意した。そして、一九九八年に処女作『レヴオリュションNo.3』で小説現代新人賞を受賞し、小説家としてデビューを果たした。

半自伝小説として書かれた『GO』は大きな反響を呼び、第一二三回・直木賞を受賞した。今までにない「新しい在日文学」の登場となった『GO』を書くに至る経緯を次のように話している。

実は、大学一年の時に作家になろうと決めてまして。(中略)大学入ってから小説書くまで八年間ぐらいあったんですけど、もう、夥しい数のものを、手当り次第に読みました。ジャンルは問わずにね。でも、「全部

書かれてるよ。新しいものを書くには、自分で文字を發明して書くしかないな」って思うぐらい、ある意味、絶望もしたんですよ。それで、日本文学にないものって思っ、じゃあ在日文学でって思っ、『GO』を書くことになったんです¹⁾。

日本文学ではなく、金城氏が「在日」だからこそ書くことができた「在日文学」での直木賞の受賞は文学界全体に新しい風を吹き込んだ。

デビュー時から自身が在日韓国人であることを公表しており、「金城一紀」という名前と、『GO』というタイトルや装丁、帯へのこだわりについて、次のように述べている。

僕が『GO』を出す時に考えたのが、絶対に韓国風の著者名では出さないこと。僕は高校の時に、本屋に行つてたとえば李恢成^{イフエソン}さんの本を手にとるとき、自分が在日なのがばれるんじゃないかという怖さがあった、日本の作家の本と一緒にレジに持っていったりしてた(笑)。だから僕は、いまの在日の若い子が手に取りやすいようにと思つたし、タイトルも『GO』のように英語。ただ、ペンネームは、ただの日本名じゃなくて、沖縄風の名前にしたんです。(金城・小熊 a

二〇〇一・二六六)

確信犯的にやろうと思ったんです。タイトルを英語にして、装丁も暗い感じじゃなくてジャズのCDジャケットをイメージして、帯のコピーも「僕はアツケなく恋に落ちた」とか。これまでの「民族のどうのこうの」じゃなくて。(林 二〇〇一・五三)

在日に対する差別やさまざまな社会的・政治的問題が存在することから、「周りの人々に自身が在日だと知られてはならない・知られたくない」、「在日であることを隠したい」という意識が常にあったのである。このように意識せざるを得ない理由の一つに、『GO』の中では次のような場面が登場する。

僕が小学校二年生だったある日、僕と友達数人が下校していると、後ろからミニパトが走ってきた。友達の何人かが車道のほうにはみ出して歩いているのを、婦人警官は見逃さず、ミニパトに搭載されているトランジスタ・メガホンを使って、こんな風に注意した。

「あんたらみたいな社会のクズは道のハシを歩きなさいっ！」

なんてひどいことを言うんだらう、と僕たちは思わなかった。僕たちの学校にはよく右翼の街宣車が来ていて、もっとひどいことを連呼したりしていたので、僕たちは慣れていた。(金城g 二〇〇七・五三―五四)

この場面は金城氏の実体験であるという⁽²⁾。在日であることが知られているだけで、国家権力である警察に注意という名の暴言を吐かれる。そんな差別的な言葉たちを浴びせられることが、在日にとっては日常茶飯事であり、腹を立てながらも慣れてしまっている。日本社会の日常の一部を切り取っただけで浮彫になる在日への差別から「在日であることが知られてしまう恐れ」につながるのである。

第二節 作品傾向―エンターテインメントと二つの顔―

大学在学時から数年間、一日に二、三冊の作品を手あたり次第読むことをノルマと課し、小説家をめざした金城氏は、一九九八年に『レヴォリューションNo.3』で小説現代新人賞を受賞し、小説家デビューを果たす。いわゆる「オチコボレ男子校」を舞台にさまざまな国籍を持つ男子高校生たちの青春群像劇は「ザ・ゾンビーズ・シリーズ」とし

て展開されている。人と人とのつながりを描いた短編集『対話篇』、映画をきっかけに人々の思いが交差する短編集『映画篇』は、それぞれに取められているいくつかの作品が実写ドラマ化されている。

幼い頃から映画に親しみ、『GO』の主人公・杉原のように学校をサボって映画館に通い詰めるほどの映画好きでもある金城氏は、『ザ・ゾンビーズ・シリーズ』のスピントフ作品である『フライ、ダディ、フライ、』の実写映画化の際には約一年間の歳月を費やして初めて脚本を執筆した。自身の作品の映像化をきっかけに脚本の執筆を手掛けるようになり、要人警護を任務とする警察官を主人公としたテレビドラマ『SP 警視庁警備部警護課第四係』、同シリーズの映画化に際しても脚本を担当した。二〇一三年から二〇一五年の約三年間にかけて漫画、ドラマ、小説の三つのメディアを連動させた『BORDER』シリーズは、すべてにおいて金城氏の原案をもとに展開された。

小説家と脚本家の二つの顔を持つ金城氏は、どちらにおいても「頭の中の映像を文字に起こしているだけ」と語り、小説と脚本の執筆における相違点を次のように述べている。

小説と脚本では、使う「筋肉」がまったく違います

ね。脚本は、自分を抑制しながら書いていく感じ。削ぎ落としたり文章でイメージを喚起しようとする。^⑤

頭の中の映像を文章に起こす上で、小説では好きなように書くことができるが、脚本では実写映像化することを念頭に構成し、物語の展開を考えなければならないのである。

小説家と脚本家の二つの顔を持ちながら、それぞれの世界で評価を得ている金城氏が携わっている作品（小説、テレビドラマ、映画、漫画原案）に共通するのは「エンターテインメント性の高さ」である。小説では次々と展開される物語のスピード感や惹きの強さがあり、どの作品においても読後には爽快感を得られ、前向きな気持ちを持つことができる。「GO」では在日問題や親友の死など重いテーマを扱いながらも軽やかにテンポよく、随所には笑いがちりばめられている。テレビドラマや映画、漫画では「文字だけでは表現できないアクション性」がある。小説では補完することのできない「動き」が「映像（絵）」として生きていくのである。

このように、小説家と脚本家の二つの顔を持ち、それぞれの世界で活躍する理由には「エンターテインメント性の高さ」が共通していると私は考える。

第三節 受け入れられた在日文学

—直木賞受賞から実写映画化まで—

『GO』は直木賞受賞だけでなく、幅広い世代の人々に読まれ、今まで在日文学を読んだことのない人々に影響を与えた。「在日文学」にもかかわらず、日本国内で受け入れられ、絶賛されたことには以下の理由が考えられる。

一つ目は、「手に取りやすい作品」ということである。角川文庫版『GO』には「感動の青春恋愛小説（金城g 二〇〇七・裏表紙）」と紹介されており、物語の冒頭には「これは僕の恋愛に関する物語だ（金城g 二〇〇七・五）」と断りが書かれているように、一人の男子高校生と一人の女子高校生の恋愛小説である。主人公・杉原と友人の誕生日パーティーで知り合った女の子・桜井との恋愛模様が軸として展開される。高校生の恋愛模様にもさまざまな形があるが、作品の中で二人の恋愛には、在日が直面するさまざまな問題が絡むのである。在日文学であることよりも、青春恋愛小説であるという触れ込みが功を奏し、国籍を問わず多くの人々が手にするという結果を生んだのではないだろうか。また、第一節で触れたように「金城一紀」という名前と『GO』というタイトルや装丁は、若い世代の在日が手に取りやすいように配慮し、こだわったと語って

る。しかし、このこだわりは若い世代の在日だけでなく、日本人をはじめとした在日を知らない人々へも作用したと考える。在日にとっても、日本人にとっても手に取りやすく、それでいて面白い。在日文学という枠組みを超えた物語であることが、受け入れられた理由の一つだと私は考える。

二つ目は、「読みやすさ」である。在日文学は「暗くて重い」というイメージを抱く人が多いのではないだろうか。そう考える理由に、在日文学では、社会的・政治的問題といったさまざまな問題を避けては通れないからである。在日が抱えるもの、日本社会が抱えるものが物語に大きな影響を与えることが多い。そんな従来の在日文学のイメージを大きく変えたのが『GO』である。主人公である在日の男子高校生・杉原の目線で描かれた『GO』は軽やかに、そして、ユーモアを交えながら物語が展開される。しかし、在日個人が抱える問題（国籍、帰化、差別、アイデンティティ）や在日全体が抱える問題（民族学校、指紋捺捺制度、日本における社会的地位）にも触れられており、植民地支配を経験した父親が在日として生活するに至る経緯など、主人公・杉原の目線で説明されている。これらが物語の中で一つずつ説明された理由は、金城氏が在日文学に感じていた不満から始まっている。

これまでの在日文学でもう一つ不満だったのは、読者が在日のことを知っているだろうという前提があつて書いているんです。僕はそういう閉鎖的な感じが許せなかったし、だから特定の人たちのものにしかなくなかったと思うんです。それで『GO』では、まず第一章を在日についての説明から始めようと思ったんです。(金城・小熊 a 二〇〇一・二六七)

日本文学界における在日文学が異質なジャンルであると同時に、在日のための在日文学といったような閉鎖的なものであるというイメージを持つ者は少なくないだろう。在日文学を知らない人もいるほど、閉じた世界を持つ在日文学に、金城氏は不満を感じていたのである。この不満を解消すべく、『GO』の第一章では在日の状況や国籍についてわかりやすく、なおかつ、面白く説明されている。さまざまな問題と物語の面白さ、杉原をはじめとした登場人物たちの魅力など、これらのバランスが「読みやすさ」を生んでいる。半自伝小説でもある『GO』の主人公・杉原のように民族学校から日本の高校へ進学し、アイデンティティの危機を感じた金城氏は、在日文学を読んだが「全然リアリティーがなくて救われなかった(金城・小熊 a 二〇〇一・二六五)」と言う。金城氏は従来の在日文学に

感じたことを次のように話している。

在日文学を読んでも、全然僕がなじんできた生活が描かれていない。だから読んだときに「何、スカしてんの」「もつと俺たちの生活を書いてくれよ」という反発が、まずあつたわけです。(中略)それから、やっぱり「在日文学の定型」みたいなものがあるんですね。乱暴な括りかもしれないですけど、基本的に過去を題材にしているか、知識人が悩んだりしているものが多い。在日文学は、歌舞伎みたいな伝統芸能と一緒だと思っんです。だから、リアリティーが感じられない。(金城・小熊 a 二〇〇一・二六五―二六六)

同じ在日であるはずなのに、自身が身を置いていた在日社会とはまるで異なる世界が描かれていたのである。これまでの在日文学ではアイデンティティが救われなかったという経験を生かし、「僕が読めなかった在日の物語、つまり在日のいまの日常感覚を持ったエンターテインメントを供給したい(金城・小熊 a 二〇〇一・二六六)」という思いから、『GO』が執筆されたのである。

直木賞受賞から約一年後にあたる二〇〇一年一月二〇日には実写映画化作品『GO』が公開された。原作をもと

に、脚本家であり舞台演出や俳優をもこなす宮藤官九郎が脚本を担当し、行定勲が監督をつとめた。作品の主人公・杉原を窪塚洋介、ヒロイン・桜井を柴咲コウが演じた。映画の公開から国内で多大な評価を受け、日本アカデミー賞をはじめとした賞レースを総なめし、国外でも公開された。監督をつとめた行定氏は、幼い頃の親友が在日を理由に差別され、不慮の事故で亡くなったことを明かし、『GO』への思いを次のように述べている。

監督になって『GO』という小説の映画化のオファーがありました。主人公は在日の青年で「国境線は俺が消してやるんだ！」と叫ぶスーパーヒーローです。小説を読んだ時、「この作品を読んでいたら親友は死んでいなかったんじゃないか」という思いが出てきました。この話をちゃんとしたかたちで映画化すれば、励まされる人、支えになる人がいるかもしれないと……。

行定氏自身の経験と亡き親友への思いが、在日を題材にした実写映画化作品『GO』に強く反映されているのである。

『GO』という作品が、誰にとつても手に取りやすい作

品であり、在日文学と青春恋愛小説の二つの側面を持っていることから、幅広い世代の人々に影響を与え、受け入れられたのではないだろうか。そして、小説が持つ魅力が実写映像化でも最大限に活かされ、実写映画化作品『GO』が高く評価されたと考える。

第四節 登場人物の在日

—『レヴォリユーションNo.3』より朴舜臣—

金城作品における在日の登場は『GO』だけではない。小説現代新人賞を受賞したデビュー作『レヴォリユーションNo.3』に登場する朴舜臣^{パクスンシ}は、オチコボレ集団「ザ・ゾンビーズ」のメンバーの誰よりも喧嘩が強く、その一方で常に本を持ち歩いている読書家の男子高校生である。舜臣という名前はいわずもがな、李氏朝鮮時代の將軍・李舜臣に由来している。『レヴォリユーションNo.3』の中での舜臣は「ザ・ゾンビーズ」のメンバーの一人にすぎないが、『ザ・ゾンビーズ・シリーズ』の二作目にあたるスピントフ作品『フライ、ダディ、フライ』では、家族を愛する冴えないサラリーマン・鈴木一^{鈴木一}のトレーナーとして活躍する様子が描かれ、作品のキーパーソンとしてスポットライトが当てられた。

高校の入学式当日、「ザ・ゾンビーズ」結成のきっかけとなった「誰が一番喧嘩が強いかを定める」ための屋上の喧嘩ののち、舜臣は次のように話している。

「人を殺すには在日ってだけじゃ足りねえんだ。あと四つか五つぐらいのハンデをしょってないと俺には人は殺せないよ。俺はこの国で生まれて、何不自由なく育ってるんだぜ。だから、ガキの頃は自分がなんで差別されるのか分からなかった。腹が立ったから、どいつもこいつも叩きのめしてやることにした。でもな、最近俺は気づいたよ。いくら喧嘩に勝ったって、最終的には俺は絶対に負けるんだ。分かるか？ 勝負はいつだって多数の側が勝つように仕組まれる」(金城 e 二〇〇八・一〇二)

舜臣は、在日という「少数の側」に属する自分にどこか諦めを持っている。しかし、「もし、『差別』という概念から完全に解放されることができたら、その瞬間に死んでも悔いはないです(金城 e 二〇〇八・二〇一)」とも話す。舜臣は、「少数の側」の勝利を完全に諦めているわけではない。学年で一番成績が良く、教師たちから有名大学への進学を期待されるほどの頭の良さを持っているが、舜臣は

既に前を見ている。

「勉強ができりゃこの国の支配層に入れるって誰かが言ってたけど、違うね。勉強ができて日本人じゃなきゃダメなんだ。俺はどうせ目指すならつぺんを指してえ。でも、まともな道を歩いても無理だ。だから、俺は大学には行かねえし就職もしねえよ。(中略)俺はここで生きてくんだけ。舜臣は煙草の挟まった人差し指と中指で、自分の頭と上腕二頭筋を順番に指した。(金城 e 二〇〇八・三九一四〇)

在日として生きる上で「差別」が存在するからこそ、自分がどのように生きるべきなのか、自分なりの生き方を既に見出している。持ち合わせた頭脳と鍛えぬいた身体を駆使して、生まれ育った日本で生き抜くのである。

「ザ・ゾンビーズ」のメンバーは日本人、在日、フィリピンと日本のハーフなど多様な性に富んでいるが、「ザ・ゾンビーズ・シリーズ」の主人公は日本人の南方である。在日を主人公にした『GO』とは違い、日本人が主人公である作品を書くことへの苦勞を金城氏は次のように語っている。

日本人ではない僕はすごく書くのが大変だった。自分は在日と呼ばれているものなのに、参政権もないし政治参加ができないのに日本社会について書いていいのかという感覚があったから。(金城・小熊 a 二〇〇一・二六八)

在日だからこそ書ける作品があるが、在日だからこそ書くことが躊躇われるのである。この在日作家だからこそその苦勞が、二作目の『GO』で生かされている。

(1)「作家の読書道 第六回金城一紀」<http://www.webdoku.jp/rensa/sakka/michi06.html> (二〇一六年十一月一六日)

(2)林真理子「マリコのここまで聞いていいのかな(四二) ゲスト金城一紀」、『週刊朝日』一〇五巻、朝日新聞社、二〇〇〇年、五三頁

(3)金城一紀「年譜(もしくは極私的映画鑑賞記)」、『青春と読書』四二巻、集英社、二〇〇七年、一四―一九頁

(4)『キネマ旬報』二〇〇五年七月号、キネマ旬報社、二〇〇五年、四〇頁

(5)前掲、四〇頁

(6)「子どもの頃に見た、朝鮮人だから」という差別…映画

監督・行定勲さんが語る『GO』への想い」<http://bigissue-online.jp/archives/1008742398.htm> (二〇一六年十一月一七日)

第三章 『GO』

第一節 僕とオヤジ

―「在日の象徴」として描かれた父親―

在日社会における親子関係は実に独特である。独特な親子関係とは、在日社会ならではの親子関係を指す。金城氏は「在日社会はやっぱり儒教社会ですから、親子関係が濃密なんです。とくに父親との関係というのは、もう避けられない。」と話すように、在日社会には儒教の思想が強く存在している。在日の儒教社会について、物語の中では次のように説明されている。

朝鮮（韓国）は昔から儒教の色濃いお国柄で、その伝統は《在日》社会にも受け継がれていた。儒教は、乱暴に言ってしまうと、「目上の人間を敬え」という思想だ。それが、家庭においては、「女子供は御主人様（父親）には決して逆らってはいけない」ということとなる。（金城g 二〇〇七：二八―二九）

この儒教の思想は、現在の韓国社会でも深く根付いており、上下関係（縦社会）を重んじている。儒教の思想が根

底に流れている在日社会特有の親子関係（特に父と子）は、『GO』の中で描かれている。

杉原家は、オヤジとオフクロ、そして、息子である杉原の三人家族である。五四歳のオヤジは、元ライト級のプロボクサーで引退後はパチンコの景品交換所を営んでいる。二〇歳という若さで杉原を産んだオフクロは、外で遊ぶことに厳しいオヤジから友達とカラオケやエステに行くための「許し」をもらうべく、度々家出を繰り返す自由な性格の持ち主である。数年前まで四軒のパチンコの景品交換所を営んでいたオヤジだが、それから二軒に減り、北朝鮮で弟が亡くなったことを知らされた日には一軒に減ってしまった。減った理由は次のように書かれている。

ある日、警察がオヤジと取り引きをしているパチンコ店を訪れ、店主に、オヤジのことを、「ヤクザと深い関係を持っていて、儲けた金がヤクザの懐に入り、それが重大な資金源になっている」と告げる。ついでに、「そんな人間とつきあつてるようじゃ、オタクに対しても厳しく目を光らせなくてはいけなくなる」とも言う。店主はオヤジがヤクザと深い関係なんて持っていないのを知っているけれど、国家権力に盾突くとどんなことになるのかもよく知っているので、言うこ

とに従わざるを得ない。そして、オヤジは二十年來の取り引きをあつという間に切られ、新しい景品交換所は、警察のOBが営むことになる。景品交換業は結構実入りがいい商売だった。

(中略)

立て続けに二軒の交換所を奪われた時、オフクロが「ずるい」とか「汚い」とか「許せない」とか「差別だ」とか、とにかく悔しい気持ちを言葉にしていると、

「あと二軒残ってるじゃないか。初めはゼロだったんだぞ。ゼロからスタートしたんだぞ。俺は算数は苦手だけど、どっちが多いかぐらいは分かるぞ」

オヤジはそう言って、ニカッと笑った。

(中略)

オヤジの笑顔に釣られて、オフクロもニコッと笑った。しばらくすると、細くなった目尻から、涙がこぼれた。

「でも、悔しいよね……」(金城g 二〇〇七・二七―二八)

杉原家の家計を支える仕事が、国家権力によって簡単に奪われてしまうのである。最大の国家権力への抵抗は、すべてを失う可能性をも秘めている。在日への差別は、個人

だけでなく、家族という一つの集団も対象になる。悔しい気持ちを言葉にするオフクロに向けられたオヤジの言葉には、第一世代として生き抜いてきた強さが表れている。

在日である杉原家の国籍は皆朝鮮籍だったが、オヤジとオフクロのハワイ旅行をきっかけに韓国籍へ変更した。国籍の変更を持ちかけられた一四歳だった杉原は、朝鮮籍にも韓国籍にもこだわりがなかったにもかかわらず、オヤジに反抗していた。中学二年生の春休みが終わりに近づいていたある日、杉原はオヤジに湘南の辻堂海岸へ無理矢理連れられ、「広い世界を見るよ……。あとは自分で決める(金城g 二〇〇七・一四)」と言われるのである。海を横目に真剣な目で見つめられながら言われたオヤジの言葉は、杉原に大きな影響を与えた。

ずっと選択しようのない環境に閉じ込められてきた僕にとつて、それは初めて与えられた選択肢だったのだ。北朝鮮か、韓国か。恐ろしく狭い範囲の選択ではあつたけれど、僕には選ぶ権利があつた。僕は初めてきちんと人間として扱われたような気がしたのであった。(金城g 二〇〇七・一五)

朝鮮籍を持つ両親のもとに産まれ、「在日朝鮮人」とし

て総連が経営する民族学校に通い、アメリカは敵国で、ハワイは「墮落した資本主義」と教えられ、将来は同じ在日が営むパチンコ屋か焼肉屋か金融業界で働くようになる。ふと気づいたときには選択肢のない環境に應じるほかなかつた杉原にとつて、初めて選択肢を与えられたのである。決められたレールの上を歩くだけの人生を送ってきた杉原が「初めてきちんと人間として扱われたような気がした」瞬間だった。そして、オヤジが与えてくれた選択肢が民族学校という「小さな円」を抜けて、「広い世界」である日本の高校への進学を決意させるのである。国籍の変更について杉原は「別に国籍を変えることにたいした拘わりはなかつたのだけれど、ちよつとやそつとのこととで転ぶつもりはなかつた（金城g 二〇〇七・一二）」と心境を述べているが、少なからず国籍を変えることに抵抗があつたのではないだろうか。罪悪感や在日であることから生じる将来への諦め、なにより「広い世界」へ飛び込む勇氣が足りなかつた。そのすべての感情を察し、背中を押してくれたのがオヤジの言葉であつたと考える。

学校が嫌いでさまざまな理由を付けてサボっていた杉原だが、民族学校での学生生活を次のように振り返っている。

そう、学校は大嫌いだつたけれど、仲間たちとその

中にいると自分が確実な何かを守られている安心感があつた。たとえそれがひどく小さな円を描いて完結して、僕を窮屈に締めつけていたとしても、そこから出て行くには相当な勇氣が必要だつた。（金城g 二〇〇七・六四）

杉原のような在日の学生が唯一守られる場所が「学校」なのである。このことを実感する前、小学五年生だつた杉原は学校をサボり、オヤジにボクシングを教わる場面で既に知らされていた。

「いま、おまえのこぶしが引いた円の大きさが、だいたいいまのおまえという人間の大きさだよ。その円の真ん中に居座つて、手に届く範囲のものにだけ手を出したり、ジツとしたりすればおまえは傷つかないで安全に生きていける。言つてること、分かるか？」
（中略）

「ボクシングが自分の円を自分のこぶしで突き破つて、円の外から何かを奪い取つてこようとする行為だよ。円の外には強い奴がたくさんいるぞ。奪い取るどころか、相手がおまえの円の中に入ってきて、大切なものを奪い取つていくことだつてありえる。それに、

当たり前だけど、殴られりや痛いし、相手を殴るのだった痛い。何よりも、殴り合うのは恐いぞ。それでも、おまえはボクシングを習いたいのか？ 円の中に収まってるほうが楽でいいぞ」（金城g 二〇〇七・五七―五八）

ボクシングを教えているだけではない。オヤジからの忠告でもあり、挑発でもあるこの言葉は、小学五年生の杉原という一人の在日がどこにいるのか、ボクシングを通して教えているのである。

親友の正一が事故に巻き込まれ亡くなり、桜井に拒絶されて以降、大学受験の勉強に勤しんでいたとある日の夜、杉原は酔っぱらったオヤジを迎えに行く。その日のオヤジは、営んでいる景品交換所が一軒なくなる知らせと、北朝鮮に住む弟の訃報を聞いていた。帰路につくタクシーの車中で目に涙を浮かべながら弟の思い出を語るオヤジに、杉原は「挑戦」する。

僕とオヤジには「最高の展開」など似合わないし、必要ないのだ。それに、オヤジは僕がぶちのめすまで、どんなことがあっても、誰に対しても、膝を屈してはいけないのだ。たとえ、国家権力に仕事を奪われよう

が、最愛の弟が死のうが、弱音を吐いてはダメなのだ。一度もダウンをしたことのない男を、初めてダウンさせるのは、この僕なのだ。

（中略）

「とにかく、もうあんたたちの時代は終わりなんだよ。貧乏くせえ時代は終わりなんだよ。」（金城g 二〇〇七・二〇八）

そう言ってオヤジに「挑戦」を申し込んだ杉原と「挑戦」を受け取ったオヤジは公園で戦う。昔、オヤジにボクシングを教わったときのように向かい合う。この時、杉原に思いつかんではオフクロの顔であった。「あの人に手を出したら、あんたを殺して私も死ぬ（金城g 二〇〇七・二一〇）」と口うるさく言われていたのだ。いざオヤジと直線状に向かい合い、戦おうとした時、一瞬だけオフクロの顔と常日頃から言われていた忠告が思い浮かんでいることから、杉原家の根底には儒教の思想が流れていることがわかる。

しかし、オヤジには敵わず、杉原は負けてしまう。

「悪いな。俺たちはこうやってどうにかこうにか勝ちを拾ってきたんだ。いまさらやり方を変えるわけに

はいかねえんだよ。」(金城g 二〇〇七・二二三)

戦時中から日本でしぶとく生き抜いてきたオヤジと第一世代の強さが、三世にあたる息子・杉原との戦いの中で描かれている。

負けず嫌いで頑固だが、オフクロには弱く、杉原が反抗した時にはボクサー仕込みのパンチが飛んでくる。ハワイ旅行を理由に朝鮮籍から韓国籍に国籍を変更したオヤジだが、少しでも日本で、在日として生きやすいようにと「足枷」を外してくれたことを、杉原自身も深く理解している。

磯貝治良氏は、杉原と「挑戦者」が高校の教室で繰り広げる戦いにおいて「闘争によって他者を求めながらも、なお孤立している(磯貝 二〇〇四・六八)」と分析し、杉原とオヤジの関係について次のように述べている。

身体による闘争(喧嘩など)を小説(言語表現)で描くのは、なかなか難しい。『GO』にも主人公をめぐるとそれが圧倒的に描かれるが、往々にして主体と客体の関係を描ききれず、主体の側が絶対化されてしまう。(中略)そのときどうしても主役(主体)の絶対化⇨孤立化に偏しやすい。

ところが、『GO』に描かれる主人公と父親の身体

的闘争では、主役の側の絶対化が拒否されている。逆に、父(他者)の側が圧倒的に主人公をぶちのめす。身体的闘争によって描出されるアボヂの壁は、ボクシングで鍛え抜かれた強靱なボディと拳そのままに、とてつもなく厚いのだ。(磯貝 二〇〇四・六八―六九)

元プロボクサーのオヤジから仕込まれたボクシングのテクニクで「挑戦者」たちを倒す杉原は、主体であることから絶対化されてしまう要素を持っている。ところが、オヤジとの戦いで負けてしまうことで絶対化が拒否されるのである。

読者からの人気も高いと言うオヤジについて、金城氏は「一種の理想」であるとともに「神様」でもあると語っている。

金城「『GO』の父親は腕力も知性もあるヒーロー、すごい在日の象徴というか、神様を作ったようなものですよ。僕は常に、神様を殺すような小説を書きたいんです。」

小熊「でもこの小説では神様を殺しそくなって負けている。最後まで、主人公の杉原は父親に勝てない

わけだから。」

金城「そう、まだ殺せない。だから僕はここで、上の世代の在日の強さを、在日一世のオヤジのかたちで表現しなかったんです。やっぱり何だかんだ言っても、強いんですよ、この連中は。まだ僕らの世代は勝ってないんです。」（金城・小熊 a 二〇〇一・二七二）

『GO』の中で第三世代は第一世代に勝てない。そして、勝ってはならない。しかし、勝てないのは今回だけ、これからの世代は日本でたくましく生きてきた上の世代に勝ち、超えていかなければならないのである。世代を超えて在日として生きていくため・在日文学を知ってもらうための「入門書」にあたるからこそ、若い世代をはじめとしたさまざまな人たちに『GO』が支持されたのだろう。また、金城氏は他のインタビュ어도「男にとって父親は真っ先に倒すべき存在だと思います。」と述べている。金城氏にとって強くて大きな存在である父親が、『GO』に登場するオヤジに反映され、さらに、「一種の理想像」であり「神様」として描かれているのである。

第二節 僕と正一

小・中学校と民族教育を受けてきた杉原が「広い世界に飛び込むため、日本の高校を受験する。杉原はこの選択を機に、教師たちからイジメを受ける。

「おまえは民族反逆者だ」と言われてみぞおちに蹴りを食らい、「おまえみたいな奴は何をやってもダメだ」と言われて頭を小突かれ、そして、最後に「おまえは売国奴だ」と言われて、またビンタを食らった。僕には「売国奴」の意味がよく分からなかった。もちろん、文字通りの意味としては分かる。でも、僕が「売国奴」であるとはどうしても思えなかった。感覚としてはそれを分かっていたのだけれど、言葉にすることはできなかった。（金城 g 二〇〇七・七二）

日本の高校受験を決意しただけで、教師たちからは人間性を否定された挙句、「売国奴」と罵倒されながら体罰を受ける。教師から暴力とともに吐かれた「売国奴」という言葉へ抱いた違和感を杉原は言葉にできなかった。そんな杉原の心情を代弁してくれたのが、正一^{ジョシイ}だった。

そして、僕の代わりに言葉にしてくれる奴が現れた。まるでヒーローみたいに。

教室の後方から声が上がった。

「僕たちは国なんてものを持ったことはありません」

(金城g 二〇〇七・七二)

国を持つ・国を背負うとは何なのか、在日として生きる者に売れる国があるのか、日本で生まれ育ちながら祖国を背負うことができるのか。正一の言葉は、杉原をはじめとした同世代(第三世代)の在日の心情を代弁するものだった。この出来事をきっかけに、杉原と正一は互いにとって親友的存在となっていく。

在日韓国人の父と日本人の母のもとに産まれた正一はハーフであるが、杉原と同じ民族学校で民族教育を受けており、高校もエスカレーター式に進学した。「朝鮮学校開校以来のバカ」と「朝鮮学校開校以来の秀才」の二人はそれぞれの高校進学後も関係を深めていた。互いの近況から大学受験、進路について話題が移ったとき、民族学校を「教団のようなもの」と例えた杉原に対して、正一は次のように語った。

「俺、宗教のことはあまりよく分かってないけど、

宗教が色々な意味で強い立場の人間の役割を持つてるなら、民族学校っていう『教団』は絶対に必要なんだよ」

(中略)

「俺みたいなガキのために、『教団』は必要なんだよ。俺はね、日本の大学でしっかり勉強して、ちゃんとした知識を持って『教団』に帰って行って、俺の後輩たちが広い場所に出て行けるようなことを教えてやりたいんだよ。」(金城g 二〇〇七・七七―七八)

杉原が民族学校に対して感じていた「確実な何かに守られている安心感」があるように、正一は民族学校に通うなかで、民族学校がもたらす存在意義を見出している。そして、民族学校という「教団」が外の世界を見るようになっていく変化にも気がついていく。民族学校が変わりつつあり、変わらなければならないように、正一自身も変わり、外の世界で得た知識を「教団」に持って帰ることを決意しているのである。しかし、正一の夢はある「悲劇」によって叶わなかった。

都内の高校に通う男子学生が好意を抱いたのは、民族学校に通う女学生だった。友人たちに囁し立てられた男子学生は、ある日の駅のホームで女学生に話しかける。しかし、

ただ顔を凝視するだけの男子学生に恐れを感じた女学生は、周りの人々に視線を投げかけた。女学生の助けを求め、視線を受け取った正一は、女学生を助けるべく二人の間に介入する。正一の険悪なまなざしに怯えた男子学生は「気合いが入るぞ」と言って友人たちに持たされたバタフライナイフを正一に振り上げてしまう。ナイフが正一の首の頸動脈をえぐり、出血多量が原因で正一は命を落としてしまう。この「悲劇」は正一の死で終わらない。正一をバタフライナイフで刺してしまった男子学生も心神が耗弱し、搬送された大病院の窓から飛び降りて死んでしまうのである。このような「悲劇」が起こってしまった背景には、日本社会と在日の異なる認識が存在する。国籍も通う高校も違うが、同じ学生であり、電車の中で見かけた女学生に一目惚れし、思いを告げなかっただけの男子学生が、女学生にとっては脅威でしかなかった。なぜなら、女学生は在日だからである。この「悲劇」の以前、女学生は同じ駅のホームでサラリーマンに肩を殴られたことがあったという経験も同じ理由である。民族学校の制服であるチマ・チョゴリを着ているだけで、周囲の目の色は変わり、在日であるというわかりやすいターゲットとして攻撃されるのである。実際に女学生が着ていたチマ・チョゴリが切り裂かれるという事件が起こっている³⁾。学校に通うだけで危険な目に晒

される可能性が存在する状況で、女学生の勘違いも、正一の勘違いも、誰も責めることはできない。正一が刺されたのち、女学生が誰にともなく叫んだ救いを求める懇願と、真剣に耳を傾けることなく電車に乗り込んでいった乗客たちの姿は、在日と日本社会の関係性を描いていると私は考える。

この「悲劇」の背景には日本社会と在日の異なる認識が存在しているが、この認識の異なりを生む要因の一つは日本人と在日の民族的問題（差別）である。友人たちが男子学生にナイフを渡したのち、その中の一人は「おまえ、あんなチョーセンにふられたら、パシリにしているからな（金城g 二〇〇七・一四五）」と言うのである。半ば告白を強要され、友人たちに抵抗できなかった気弱な男子学生への脅迫の中には、在日への侮蔑的意識が混ぜられていた。二人の高校生の死は、日本社会と在日の異なる認識を表している。そして、正一の死には、正一の夢であった外の世界で得た知識を「教団」に持って帰り、自身のような在日のため・後輩たちのためにも民族学校という「教団」を変えようとする難しさを表しているのではないだろうか。秀才の正一でさえも、「教団」を変えることは容易いことではない。「教団」を変える努力が実を結ぶことの難しさを、正一の死をもって示していると考える。

突然訪れる親友・正一の死は、物語の中で大きな役割を担っている。それは、のちに展開される杉原と桜井の関係性を変える役割である。正一の死が杉原を動かし、桜井への告白へとつながる。そして、二人の関係性が変わっていくのである。

第三節 僕と桜井

—「日本の象徴」として描かれた彼女—

『GO』は在日文学でありながら、「青春恋愛小説」でもある。主人公・杉原と恋に落ちる桜井。小学校・中学校と民族教育を受けてきた杉原が受験し、入学した卵の白身部分のカロリー数ぐらいいかない偏差値の私立男子高校で初めてできた「友達」である加藤の誕生日パーティーで二人は出会う。この出会いをきっかけに二人はデートを重ね、距離を縮めていく。

杉原が桜井の家に招かれたとき、はじめて桜井の家族と顔を合わせる。有名商社に勤める桜井の父は、黒人を「アフリカン・アメリカン」、インディアンを「ネイティブ・アメリカン」と呼ぶような人だった。

親友・正一の死から二日後におこなわれた告別式のあと、杉原は桜井を呼び出す。帝国ホテルに辿り着いたのち、杉

原は「ずっと隠してたことがあるんだ（金城g 二〇〇七・一七三）」と自身が在日韓国人であることを告白するのである。

「俺は——、僕は、日本人じゃないんだ」

（中略）

「お父さんに……、子供の頃からずっとお父さんに、韓国とか中国の男とつきあっちゃダメだ、って言われてたの……」

（中略）

「……お父さんは、韓国とか中国の人は血が汚いんだ、って言ってた」（金城g 二〇〇七・一七四—一七七）

桜井にこのように教え込んだのは、初対面の杉原に対して「杉原君はこの国が好きかい？（金城g 二〇〇七・一一七）」と問いかけた、日本が嫌いな父だった。この「無知と無教養と偏見と差別によって吐かれた言葉（金城g 二〇〇七・一一七）」たちを幼い頃から父に教え込まれてきた桜井は、何の疑いもなく、一つの教養として身につけていたのである。また、父の教えに疑問を持たず過ごしてきたことから、桜井にとって、杉原のような在日が交わる

ことのない遠い存在であったこともわかる。

そんな桜井に杉原は「どういう風に、この人は日本人、この人は韓国人、この人は中国人、て区別するの? (金城g 二〇〇七・一七七)」と問いかけ、人間のルーツについて説明する。しかし、その時の桜井は変わらなかった。

「本当に色々なことを知ってるのね。でもね、そういうことじゃないの。杉原の言ってること、理屈では分かるんだけど、どうしてもダメなの。なんだか恐いのよ……。杉原がわたしの体の中に入ってくることを考えたら、なんだか恐いの……。」(金城g 二〇〇七・一七九)

「恐い」という一言が杉原を傷つけ、拒絶する。

二人が結ばれようとする場面について、金城氏は「帝国ホテルで桜井が杉原を受け入れなくなるところは、在日が日本国から拒まれてるんです(金城・小熊a 二〇〇一・二七二)」と説明する。帝国ホテルという場所も、日本を代表するホテルの一つであることから意識的に選択された舞台である。日本の男子学生と正一が互いの誤った認識のすれ違いから死を遂げたように、桜井と杉原の関係性は、日本社会の在日に対する拒絶を表している。

しかし、杉原と桜井の関係は、ここで終わらない。クリスマス夜の夜、桜井は杉原を小学校の校庭に呼び出す。あの日、杉原が自身の名前を告げられないまま、二人で流れ星を眺めた思い出の場所である。

「杉原と会わないあいだ、わたしなりに色々考えて、たくさんの本を読んで、難しい本もたくさん読んで

——
(中略)

「もう杉原が何人だってかまわないよ。時々、飛んでくれて、睨みつけてくれたら、日本語が喋れなくなってかまわないよ。だって、杉原みたいに飛んだり、睨みつけたりできる人、どこにもいないもん」

「ほんと?」と僕は桜井の胸に顔をつけたまま、訊いた。

「ほんとだよ。わたし、ようやく、そのことに気づいた。もしかしたら、杉原を見た初めから気づいてたのかもしれないけど」(金城g 二〇〇七・二三〇—二三六)

杉原と会わない間に桜井は、たくさんの本を読んで、自分なりに知識を身につけた。父が言う「韓国とか中国の人

は血が汚い」という教えが誤ったものと気づいたのである。桜井が自らの力で学び、杉原を受け入れる。「杉原を受け入れる」という桜井の選択は、杉原の選択と同じなのではないだろうか。桜井も杉原のように、自身がいた「安全な小さな円」から抜け出し、「広い世界」へと飛び込むのである。杉原はオヤジによって、桜井は杉原によって変わる。そして、桜井の選択によって、杉原もまた変わっていく。

一度の拒絶を経て、桜井が杉原という一人の人間を選択し、受け入れる結末について、金城氏は次のように述べている。

でも最後のシーンでは、杉原は桜井に受け入れられて、桜井に救われ直す。マイノリティがマジョリティーに受け入れられて、救われなさいといけない。というか、マジョリティーがこういう存在であってほしいということなんですよ。(金城・小熊 a

二〇〇一・二七二―二七三)

日本の象徴である「桜」を名前につけ、「桜井」日本を描いたことに対して「象徴化をやりすぎた(金城・小熊 a 二〇〇一・二七三)」、「本当はこの小説の失敗だったか

もしれない(金城・小熊 a 二〇〇一・二七二)」とも言及しているが、桜井の存在が在日としての「望み」であってほしいという「願望」を桜井椿という日本人に託しているのである。

金城氏の「願望」を託された桜井は、杉原に対して二人が知り合ったあの日のように「行きましよう(金城 g 二〇〇七・二三八)」と話しかける。この言葉には、ただ「違う場所へ行こう」という意味ではなく、「何事も一緒に乗り越えて行こう」という思いが込められていると私は考える。民族的問題から社会的問題、政治的問題などさまざまな問題が待ち受けているかもしれないが、国籍を超えて一人の人間という「個人」を選択することができた杉原と桜井は、国境の向こう側へ二人で乗り越えていくのである。

(1)「POSTブックワンダーランド著者に訊け! 金城一紀『GO』」、『週刊ポスト』三三巻、小学館、二〇〇〇年、一六七頁

(2)「金城一紀さんへの二〇の質問」、『本の旅人』、二〇一一年三月号、社、二〇一一年、二二―二五頁

(3) 尹健次「きみたちと朝鮮」、岩波書店、一九九二年、八一―九頁

第四章 杉原の選択とアイデンティティ

第一節 差別―日本、韓国、在日―

この物語の中で杉原は、日本人、韓国内に住む韓国人、そして、在日から差別を受ける。主人公・杉原に限らず、また、『GO』という作品上だけでなく、さまざまな場面・人々から在日は差別を受けるのである。在日にとって民族的問題（差別）が切り離せないように、在日文学において同じなのである。『GO』の中でおこる差別について、主人公・杉原が対象となつて受けたものを中心に振り返る。

（一）日本人

日本人から在日に向けられる差別である。本論第二章第一節（金城一紀と『GO』で挙げた婦人警官による「あんたらみたいな社会のクズは道のハシを歩きなさいっ！」（金城g 二〇〇七・五三）という発言をはじめ、天皇誕生日の四月二十九日には「朝鮮人狩り」と称して体育系と民族系の日本人がイジメにやつてきたり（金城g 二〇〇七・六三）、加藤が主催するダンス・パーティーの用心棒のアルバイトをした際には「チョン公」という差別用語とともに「尻尾巻いて国に帰るか？」（金城g

二〇〇七・二三五）」と挑発される。そして、桜井からは「韓国とか中国の人は血が汚いんだ（金城g 二〇〇七・一七七）」と言われてしまう。これらの差別はすべて、在日への偏見、侮蔑を含んだ差別である。

（二）韓国内に住む韓国人

韓国内に住む韓国人から在日に向けられる差別である。高校生の杉原が家族とお墓参りのために済州島へ行ったのちに降り立った韓国での出来事である。

ホテルに向かっている途中、四十がらみのタクシ―の運転ちゃんに話し掛けられた。

「《在日》か？」

僕が韓国語で「そうだ」と答えると、運転ちゃんは鼻をフンと鳴らし、唇の端を嫌味に吊り上げながら、にやけ面を作った。

（中略）

ホテルに着くまで、タクシ―の運転ちゃんは、「何歳だ」とか「韓国をどう思う」とか「キムチは食えるのか」とか、どうでもいい質問をしてきて、僕が韓国語で答えるたびに、「なんだその発音は」という感じで鼻を鳴らした。（金城g 二〇〇七・八二―八三）

このあと杉原は、運転手にお釣りをごまかされてしまうのである。なぜ、同じ「韓国人」であるにもかかわらず、韓国内に住む韓国人から差別を受けるのか。この理由について、物語の中では次のように説明されている。

韓国人の一般的な意識の中には「《在日》は恵まれた日本で、苦勞もせず何不自由なく暮らしている《韓国人》」という共通認識があるらしく、中には僻み根性を丸出しにして突つかかってくる韓国人がいる。どうやらタクシীরの運ちゃんはそのようなタイプの人間らしかった。(金城g 一一〇〇七・八二二)

韓国では貧富の差が激しい格差社会であることから、在日は「日本という恵まれた環境で暮らしている」という認識が存在している。韓国内に住む韓国人による在日に対する差別と偏見について、仲尾宏氏は以下の三つの理由を挙げている。¹⁾

一つ目は、戦前に日本へ渡った人々は強制連行だけでなく、働き口の募集に応じて日本へ渡った人々も多かったことから「祖国を棄てた」と受け取られているからだといふ。二つ目は、在日の人々が戦後の日本の復興・経済成長の中で、安定した生活を送ることに成功したという「お金持

ち」ぶりへの嫉妬があったからと述べている。

三つ目は、ほとんどの在日が韓国人であるにもかかわらず、韓国の文化を身につけていないからであるという。

韓国内に住む韓国人たちは、在日に対してそれぞれ複雑な感情を抱いており、それが差別や偏見につながってしまっているのである。

〈三〉在日

三つ目は、同じ在日から向けられる差別である。本論第三章第二節(僕と正一)で述べた杉原と正一が距離を近づけるきっかけは、同じ在日である教師からの差別である。教師から暴言を吐かれながら暴力を振るわれる理由は、二つある。

一つ目は、杉原が日本の高校を受験することである。民族学校に入学した在日は、中学校、高校、大学とエスカレーター式に進学するのが一般的である。そんな中で小・中学校と民族学校で教育を受けてきた杉原が民族学校のエスカレーターから降りることは、イジメの対象になるのである。

二つ目は、朝鮮籍から韓国籍に変更したことである。受験勉強のために学習塾へ通う姿を友達に目撃されて以降、教師たちからイジメがはじまったと言ひ、国籍を変更して以降、イジメが特にひどくなっていたと言ひ。国籍の変更

にともなうイジメは杉原だけでなく、「オヤジも総連のむかしからの仲間にシカトを食らう、というイジメに遭っていた（金城g 二〇〇七・七二）」という。

正一の告別式の日、小学校以来の悪友・元秀ウオシスからは「日本学校に行つて、日本人に魂を売っちまったのか（金城g 二〇〇七・五九）」と言われる。元秀がこのように言う理由には、仲間が日本人によつて殺されたこと、正一の敵討ちに杉原が参加しないと云つたからである。民族学校での男同士の友情について、物語の中では次のように説明されている。

まわりにいる連中は、血を分けた兄弟みたいなものだった。よほどのことがないかぎり、ほとんど変わらな顔ぶれのまま、最低でも高校まで一緒に一貫教育を受けるのだ。まるで長い長い合宿生活を送っているようなもので、僕たちのあいだには、友情以上のものが芽生える。そして、芽生えたものを成長させるのは、やっぱり「差別」という養分だった。（金城g 二〇〇七・六三）

在日社会に儒教の思想が流れているように、民族学校内での友情（特に男同士）は濃く、同じ在日であるという仲間意識が強いのである。これらの理由は、在日社会の中で

「裏切り者」、「よそ者」として新たに認識され、差別がはじまるのである。

日本人、韓国に住む韓国人、在日から差別は、杉原のアイデンティティに強く影響を与える。

第二節 葛藤

前節で述べた差別の中でも、桜井の言葉は杉原のアイデンティティを大きく揺さぶる。

広い世界を見るために飛び込んだ日本の私立の男子高校で出会った加藤の誕生日パーティーで、一人の女の子に目を奪われる。二人の視線が合わさったとき、桜井は魅力的な笑みを浮かべ、杉原は睨みつけていた。桜井が杉原の手に触れ、心情を読み取ったとき、彼女の「行きましょう（金城g 二〇〇七・四二）」という言葉とともに、二人はパーティー会場から抜け出す。東京タワーに向かって歩き進めた先、小学校の正門を乗り越え、好きな映画や音楽、将来の夢について話したのち、杉原は桜井に名前を尋ねる。

「ねえ、もしよかったら名前を教えてくださいませんか」

「名前なんてどうでもいいじゃない」

「……………」

「桜井」

「下のほうは？」

「教えたたくない。嫌いな、下の名前」

「僕の名前は——」

「杉原でしょ？」

「どうして……」

「ふふふ、さつき読み取ったから。でも、下の名前は読み取れなかった。下の名前は？」

「……名前なんてどうでもいいや」

「そうよね」

「うん」

「……」

「……」（金城g 二〇〇七・四八）

自身の名前が嫌いであることを理由に教えなかった桜井と、自身が在日であることから教えられなかった杉原。この場面では、杉原が在日「らしい」名前であることもわかる。「杉原」という名字は通名だが、名前に通名は存在しない。

互いの下の名前を知ることなく会話を終えたのち、杉原の桜井への思いは次のように描かれている。

僕は桜井に触れたかった。どんな場所でも良かった。触れた時、桜井が僕の手を受け入れてくれたら、胸に満ちている焦燥感を消し去ることができると違っていた。僕は、目の前で微笑んでいる女を絶対に失いたくなかった。出会ってまだ数時間しか経ってなく、ほとんど得体の知れない女に対して、驚くほど強く思っていた。そして、彼女なら僕の手を受け入れてくれるように思えた。（金城g 二〇〇七・四九—五〇）

彼女に感じたのは愛おしさだけではない。好きな人を失いたくない恐怖や焦り、名前を教えることにすら躊躇いが生じる在日ならではの葛藤、彼女なら自身を受け入れてくれるのではないかと期待、受け入れてほしいという願望、さまざまな感情が杉原の中で渦巻く。

自身が在日であることを告げる時、杉原は「僕自身はたいたことじゃないと思ってるんだけど……」（金城g 二〇〇七・一七三）と一言付け加える。この一言は、切り出すことへの躊躇いとともに、杉原が抱えていた葛藤を桜井が「たいしたことじゃない」と受け止めてくれることを願ったのではないだろうか。切り出すことはできたものの、在日であることをその場で言い出せずにいたことから発せられた言葉でもあるが、桜井を失いたくない気持ち

表れている。

杉原が桜井に拒まれた時、初めて互いに名前を打ち明け
る。

「わたしの下の名前はね、『椿』っていうの。『椿姫』
の『椿』。桜と椿が一緒に入ってる名前なんてめちゃ
くちゃ日本人みたいで教えるのがイヤだったの」

「僕の本当の名前は、『李』。李小龍ブルース・リーの『李』。めっちゃ
くちゃ外国人みたいな名前前で、こんな風に君を失うの
が恐くて、教えられなかった」(金城g 二〇〇七..

一八〇)

杉原は教えられなかった理由とともに、皮肉を交えて「本
当の名前」を告げるのである。

杉原が桜井に拒まれる前、オフクロが働く焼肉屋で正一
と夕飯をご馳走になった時、二人とその場にいた従業員た
ちが皆バラバラの国籍を持つ者だったことをきっかけに、
ミトコンドリアDNA、ルーツ、国籍へと話が展開する。
杉原は「そもそも、国籍なんてマンシヨンの賃貸契約書み
たいなものだよ(金城g 二〇〇七..八九)。」と言い、根
拠として一番好きだという憲法の条文を述べる。

「でも」と《在日朝鮮人》の男が言った。「俺たちが
色々なことを知ってたって、差別する側が知らなきゃ
意味ないんじゃないかな」

「いや、俺たちが知つとけばいいんだよ。」と僕は言っ
た。「国籍とか民族を根拠に差別する奴は、無知で弱
くて可哀想な奴なんだ。だから、俺たちが色々なこと
を知って、強くなつて、そいつらを許してやればいい
んだよ。まあ、まだ俺はその境地にはぜんぜん達して
ないけどね」(金城g 二〇〇七..九〇)

ここでいう「国籍とか民族を根拠に差別する」言葉が、
好きな人・失いたくない人から発せられたのである。桜井
の口から出た言葉に、杉原は「シヨックはなかった(金城
g 二〇〇七..一七七)」と話し、否定する。杉原にとつ
てこの時の桜井は「無知で弱くて可哀想な奴」というより
も「理解してほしい相手」だったのではないだろうか。し
かし、桜井からは「どうしてこれまで黙ってたの? たい
したことじゃないと思つてたら、話せたはずじゃない(金
城g 二〇〇七..一七九)」、「ひどいよ、急にあんなこと
言い出して、こんな風にしちゃうなんて……(金城g
二〇〇七..一七九)」、「わたし、初めてだったのよ……。
そうでなくても、恐かったのよ(金城g 二〇〇七..

一八〇」とまで言われてしまう。

そして、ホテルからの帰路で出会った若い警察官に本心を話し出す。

「俺、これまで差別されてもぜんぜん平気だったんですよ。差別する奴なんてたいに言ったって分らない奴だから、ぶん殴っちゃえばよくて、喧嘩だったら負けない自信があったから、ぜんぜん平気だったんですよ。多分、これからも、そういった奴らに差別されるなら、ぜんぜん平気だと思っんですよ。」

(中略)

「でも、彼女に会ってからずっと差別が恐かったんです。そんなの初めてでした。俺、これまで本当に大切な日本人と出会ったことがなかったんですよ。それも、めちやくちや好みの女の子なんて。だから、そもそもどんな風につきあったらいいかもよく分からなくて、それに、もし自分の素性を打ち明けて嫌われたら、なんて思っちゃったから、ずっと打ち明けられなかったんです。彼女は差別するような女じゃない、なんて思いながらも、でも、結局は彼女のこと信じてなかったんですよ……。俺、たまに、自分の肌が緑色

かなんかだったらしいのに、って思うんです。そうしたら、寄ってくる奴は寄ってくるし、寄ってこない奴は寄ってこない、って絶対に分かりやすくなるじゃないですか……」(金城g 二〇〇七・一八八—一八九)

二人が出会うきっかけを与えてくれた加藤に、桜井について「おまえが気になるなら、俺が色々調べてやってもいいぞ。その子、高校生なんだろう？ 高校の名前が分かりや、ツテを辿ってたいの情報は手に入る(金城g 二〇〇七・一一三)」と言われた時、少し迷って「いいや、彼女が何者だろうと、関係ねえ(金城g 二〇〇七・一一三)」と断った杉原だが、彼女のことを信じていなかったと自身を責める。初めて差別されることが怖いと思うほど、杉原にとって桜井が大きい存在であることがわかる。嫌われたくないという恐れから、自身の国籍を打ち明け、拒まれる。初めての感情、そして、経験が杉原を変えていくのである。

第三節 辿り着いた先

—杉原の選択とアイデンティティ—

アイデンティティとは「人格における存在証明または同

一性。ある人の一貫性が時間的・空間的に成り立ち、それが他者や共同体からも認められていること。自己の存在証明。自己同一性。同一性⁽²⁾である。金城氏が高校時代に「アイデンティティの危機」に陥った経験⁽³⁾を話すように、在日には自身のアイデンティティについて直面する壁があるように思う。その理由には、本章で述べた差別や、他者に対して、そして、自身に対しての葛藤が生まれるからである。黒古一夫氏は次のように述べている。

「在日」朝鮮人・韓国人の場合、(中略)表相的には「国家・国境」を超えた(意を介さない)「コスモポリタン(流浪者)のように見えるかもしれないが、「定住者」非定住者」というような問題では解けない図式がそこには横たわっているのである。そこには、「歴史」の問題とさえばいいのか、あるいは「社会(生活)」との関係とさえばいいのか、はたまた「日本」との距離の取り方とさえばいいのか、「個」の意識だけでは解決できない問題が存在したのである。特に「在日」二世・三世・四世たちにとって、これらの問題は深刻な「アイデンティティ・クライシス」として顕現している。(黒古 二〇〇七:四八)

在日のアイデンティティには、個人の意識だけでは解決できないさまざまな問題が存在するのである。

在日文学において世代ごとに作品傾向が異なるように、アイデンティティの考え方・捉え方も世代ごとに異なると私は考える。若い世代のアイデンティティの葛藤と多様化について、福岡安則氏は次のように述べている。

「在日」の若者たちにとっては、いわば所与としての自己が、二重の要素によって形成されている。

一つの要素は、日本社会のなかで、日本語を母語としながら成長することをおして、いわば自然過程として、日本文化を身につけてしまっているという側面である。ものの考え方、感じ方、価値観、生活様式などの面でまわりの日本人たちと共通するものをもつ。日本社会にたいして「同化された自己」の存在、これが一方の要素である。

いま一つの要素は、いくら日本社会のなかで育成してきたとはいえ、必ず、なにか民族的なものを引き継いでいるという側面である。家庭内でどれだけ民族文化が保持されているか、「在日」の集住地域で生まれ育ったか否か、民族学校に通学したか否か、といった生活環境のちがいに、民族性の自覚の度合には

個人差がある。だが、ものの考え方、感じ方、価値観、生活様式などの面で、多かれ少なかれ、まわりの日本人たちとは異質なものをもちつことは確かだ。日本社会にたいして「異化された自己」の存在、これがもう一つの要素である。

(中略)

日本社会には、まだまだ、在日韓国・朝鮮人にたいする蔑視、忌避、差別の感情が渦巻いている。成長していく過程で、「在日」の若者たちの多くが、日本人の抱く韓国・朝鮮人にたいするマイナスのイメージを内面化させられる。韓国・朝鮮人にたいするマイナスのイメージが、いわば「強力な磁場」として存在するがゆえに、「同化された自己」と「異化された自己」を併せ持つ「在日」の若者たちの内面で、「同化志向」と「異化志向」が錯綜する。(福岡 一九九三・八一—)

在日三世にあたる主人公・杉原も二重の要素によって自己が形成されている。日本で生まれ、日本語を母語として生活している。その一方で、小学校から民族学校で教育を受け、杉原家には儒教の思想が存在する環境で育つたことから、自身が在日であり、異化された自己を持っているこ

とを自覚している。異化された自己を持ち、自覚していることから、葛藤が生まれるのである。

杉原は、加藤、元秀、宮本のそれぞれから「誘い」を受ける。高校で初めてできた友人の加藤は「俺とかおまえみたいな奴は、初めからハンデを背負って生きてるようなもんだ。(中略)俺たちみたいな連中がこの社会でのしてこうと思つたら、正攻法じゃダメなんだよ(金城g 二〇〇七・一三三)。」と言ひ、ある広域指定暴力団の幹部組員を父に持つ自身と在日である杉原が同じ「マイノリティ」に属する者として重ね合わせ、クラブの共同経営を持ちかける。小学校以来の悪友である元秀からは、正一の告別式の日、正一を刺した男子高校生が在籍していた日本高校へ「狩り」に行こうと誘われる。同学年で杉原と同じ在日の宮本は、在日の若い世代を集めたあるグループに杉原を勧誘する。しかし、杉原は三人それぞれからの「誘い」を断る。元秀には「正一もそれを望んじやいねえはずだ(金城g 二〇〇七・一五八)」と亡くなった正一の思いを汲み取ると同時に、相手(日本学校に通う男子高校生たち)を傷つけたところでも解決しないことを主張する。加藤には「俺とおまえは違うんだよ(金城g 二〇〇七・一三三)」と言ひ、自身と加藤との違いを示す。宮本には「おまえと見てるものが違うだけだ(金城g

二〇〇七：二一七」と言い、次のように伝えるのである。

「おまえと喧嘩はしたくないんだ。さつきも言ったように、おまえは正しいことをやろうとしている。俺がそれに加われないってだけのことだ。」

(中略)

「倒さなくちゃいけないすげえ奴がいるんだよ。そいつを倒すために勉強しなくちゃならないし、体も鍛えなくちゃならない。とりあえずそいつを倒さなくちゃ、先に進めないんだ。でも、そいつを倒したら、俺はほとんど無敵だ。世界だって変えられる。」

(中略)

「俺が国籍を変えないのは、もうこれ以上、国なんでものに新しく組み込まれたり、取り込まれたり、締めつけられたりされるのが嫌だからだ。もうこれ以上、大きなものに帰属してる、なんて感覚を抱えながら生きてくのは、まっぴらごめんなんだよ」(金城g

二〇〇七：二一八)

宮本からの誘いを断るが、宮本が取り組もうとしていることに対して「正しいこと」と認め、否定しない。杉原は、宮本が作ろうとしている集団に属するのではなく、個人を

選択するのである。

そして、桜井には「俺は何者だ？」(金城g 二〇〇七：二三〇)」と問いかけたのち、次のように主張する。

「別にいいよ、おまえらが俺のことを《在日》って呼びたきゃそう呼べよ。おまえら、俺が恐いんだろ？

何かに分類して、名前をつけなきゃ安心できないんだろ？(中略)俺は《在日》でも、韓国人でも、朝鮮人でも、モンゴロイドでもねえんだ。俺を狭いところに押し込めるのはやめてくれ。俺は俺なんだ。いや、俺は俺であることも嫌なんだよ。俺は俺であることも解放されたいんだ。俺は俺であることを忘れさせてくれるものを探して、どこにでも行ってやるぞ。」(金城g 二〇〇七：二三一—二三二)

オヤジ(家族)、正一、桜井との関係性を通して、また、在日として受けてきた差別、偏見、侮蔑、拒絶、葛藤などのさまざまな経験が、杉原という個人のアイデンティティの形成に大きく影響を与えた。杉原はオヤジと戦った帰りの車中で「いつか、俺が国境線を消してやるよ」(金城g 二〇〇七：二一五)」と言ったように、日本人でも韓国人でもない、国籍にとらわれず、国境を越えてどちらにも属

さない一個人を選択するのである。そして、差別や偏見といった問題に直面した時、杉原は乗り越えるべき問題として乗り越えていく。杉原の選択は、金城氏がかつて在日という枠にとらわれないために「コリアン・ジャパニーズ」⁽⁴⁾を自称した選択、そして、姜信子が辿り着いた選択と通ずる。

〈在日韓国人〉日本人でもない。朝鮮半島に生きる韓国人と同じでもない。私にとつての在日韓国人とは、明らかに新しい種類の人間なのである。

日本という文化・風土の下で、朝鮮民族の血を持つ私が、被差別体験という触媒により、「在日韓国人」になった。私という在日韓国人は、韓国人にも日本人にも収斂されない。日本人に対して戦いを挑むこともしない。朝鮮半島を視野から外すこともない。そして、日本で日本人と共に生きる。韓国人ならぬ「在日韓国人」として、普通の口調で、通じる言葉を探して、日本人に語りかけるのである。(姜 一九八七・二二二)

金城氏は「エンターテインメントを書くことで、在日の問題も、差別の問題も、自分の実感が伴うものにしたかった。痛快で、爽快で、カタルシスがあること、そして、魅

力的な主人公とハッピーエンドが、この小説には必要だった。」⁽⁵⁾と言い、物語の主人公である杉原について、次のように話している。

僕の理想というのは、(中略)国境線があったとして、知恵を使ってもそこを潜り抜けられるし、また、走って銃弾を潜り抜けられなくてもいける、知と力と兼ね備えたヒーロー。権力をすり抜けるためには、本当に汚いことも、技術も、生きる知恵も、知識も、体力も必要だというのが、大事なテーマなんです。(金城・小熊 b 二〇〇一・三二九)。

『GO』の中の杉原は、金城氏が語る理想の要素を持った「ヒーロー」として描かれたのである。『GO』における主人公であり、「ヒーロー」として描かれた杉原だが、彼が持つ理想は普遍的なものであると私は考える。国籍や肌の色、マジョリテイやマイノリティを越えた世界を、杉原は理想としているのではないだろうか。そんな世界に変えるべく、杉原も色々な人々とかかわり、さまざまな経験を通して変わり、奮闘するのである。杉原と桜井が互いを通して変わったように、杉原のような「ヒーロー」が世界を変えられるのかもしれない。

(1) 仲尾宏『Q & A 在日韓国・朝鮮人問題の基礎知識』、

明石書店、一九九七年、三四―三五頁

(2) 新村出(編)『広辞苑 第五版』、岩波書店、一九九八年

(3) 金城一紀・小熊英二「在日文学への挑戦」それで僕は、指定席を壊すために『GO』を書いた【前篇】、【中央公論】、中央公論新社、二〇〇一年、二六五―二六六頁

(4) 『POSTブックワンダーランド著者に訊け!金城一紀氏

『レヴォリューションNo.3』、『週刊ポスト』三三巻、小学館、二〇〇一年、八九―九一頁

(5) 『POSTブックワンダーランド著者に訊け!金城一紀』、『GO』、『週刊ポスト』三三巻、小学館、二〇〇〇年、一六八頁

参考・引用文献一覧

井家上隆幸「エンターテインメント小説の現在(九)金城一

紀の巻」、『図書館の学校』、図書館の学校、二〇〇〇年

李光圭・賈鍾壽『共生社会を目指して―在日韓人社会と日本

―』、大学教育出版、二〇一〇年

李光圭・崔吉城『差別を生きる朝鮮人』、第一書房、二〇〇六

年

伊地知紀子「書評 金城一紀『GO』」、『コリアン・マイノリ

ティ研究』、新幹社、二〇〇〇年

磯貝治良「在日」文学論』、新幹社、二〇〇四年

磯貝治良・黒古二夫(編)『在日文学全集〈李恢成〉』、勉誠出版、二〇〇六年

『在日文学全集〈李良枝〉』、勉誠出版、二〇〇六年

『在日文学全集〈金達寿〉』、勉誠出版、二〇〇六年

金城一紀 a 『映画篇』、角川書店、二〇一四年

b 『対話篇』、角川書店、二〇〇八年

c 『フライ、ダディ、フライ』、角川書店、二〇〇九年

d 『レヴォリューションNo.0』、角川書店、二〇一三年

e 『レヴォリューションNo.3』、角川書店、二〇〇八年

f 『BORDER』、角川書店、二〇一四年

g 『GO』、角川書店、二〇〇七年

h 『SP 警視庁警備部警護課第四係』、角川書店、

二〇一〇年

i 『SPEED』、角川書店、二〇一一年

『年譜(もしくは極私的映画鑑賞記)』、『青春と読書』

四二巻、集英社、二〇〇七年

金城一紀・小熊英二 a 「在日文学への挑戦」それで僕は、指

定席を壊すために『GO』を書いた【前篇】、【中央

公論』、中央公論新社、二〇〇一年

b 「在日文学への挑戦」それで僕は、指定席を壊す

ために『GO』を書いた【後篇】、『中央公論』、中央公論新社、二〇〇一年

金城一紀・福井晴敏「小説がめざすべき場所へ」、『新刊展望』四四巻、日本出版、二〇〇〇年

姜信子「ごく普通の在日韓国人」、朝日新聞社、一九八七年

金石範「国境を越えるもの——「在日」の文学と政治」、文藝春秋、二〇〇四年

黒古一夫「アイデンティティ・クライシス——（在日）文学が直面する一つの問題」、『社会文学』二六巻、日本社会文学会、二〇〇七年

真田信治・生越直樹・任榮哲（編）『在日コリアンの言語相』、和泉書院、二〇〇五年

新村出（編）『広辞苑 第五版』、岩波書店、一九九八年

仲尾宏「Q & A 在日韓国・朝鮮人問題の基礎知識」、明石書店、一九九七年

林真理子「マリコのこゝまで聞いていいのかな（四一）」ゲスト金城一紀、『週刊朝日』一〇五巻、朝日新聞社、二〇〇〇年

樋口雄一『日本の朝鮮・韓国人』、同成社、二〇〇二年

黄泰模「在日韓国人文学——金城一紀『GO』を中心に」、『千里山文学論集』七二巻、関西大学大学院文学研究科、二〇〇四年

福岡安則「在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ」、中央公論社、一九九三年

朴鐘鳴『在日朝鮮人の歴史と文化』、明石書店、二〇〇六年
梁石日「在日文学の地平」、『境域の文学 21世紀文学の創造』⑤、岩波書店、二〇〇三年

尹健次「きみたちと朝鮮」、岩波書店、一九九一年
——「変容としての在日性——在日朝鮮人文学／在日文学を考

える——、『社会文学』、不二出版、二〇〇七年

「金城一紀・直木賞受賞作家」<http://prizesworld.com/naoki/jugun/jugun123KK.htm>（二〇一六年一〇月一四日）

「金城一紀ロングインタビュー」<http://ddnavi.com/dav-contents/14470/a/>（二〇一六年十一月一六日）

「帰化許可申請者数、帰化許可者数及び帰化不許可者数の推移」<http://www.moj.go.jp/content/001180510.pdf>（二〇一六年一〇月二七日）

「子どもの頃に見た、朝鮮人だから」という差別：映画監督・行定勲さんが語る『GO』への想」<http://bigissue-online.jp/archives/1008742398.html>（二〇一六年十一月一七日）

「作家の読書道 第六回金城一紀」<http://www.webdoku.jp/rensai/sakka/michi06.html>（二〇一六年十一月一六日）

「作家の読書道 第六回金城一紀」<http://www.webdoku.jp/rensai/sakka/michi06.html>（二〇一六年十一月一六日）

「金城一紀さんへの二〇〇の質問」、「本の旅人」二〇一一年三月号、角川書店、二〇一一年

「POSTブックワンダーランド著者に訊け！金城一紀」『G O』、『週刊ポスト』三三三卷、小学館、二〇〇〇年

「POSTブックワンダーランド著者に訊け！金城一紀氏」『レヴォリューションNo.3』、『週刊ポスト』三三三卷、小学館、二〇〇一年

『キネマ旬報』二〇〇一年一〇月号、キネマ旬報社、二〇〇一年

『キネマ旬報』二〇〇五年七月号、キネマ旬報社、二〇〇五年
『ダ・ヴィンチ』二〇〇一年一〇月下旬号、メディアファクトリー、二〇〇一年

(あんどう ゆうな・実践女子大学

文学部国文学科

平成二十八年卒業)